

佐土原キリスト教会 2021年6月20日・礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 19章 23～30節

説教題：成し遂げられた

ここしばらくインターネットで「生き方セミナー」のような動画を見ることが多くなりました。ある動画の中でヴィクトール・フランクルという精神科医の話が出ていました。この方はナチスのアウシュビッツ収容所を生き抜いた方ですが、彼は生きるか死ぬかの極限状態の中で「どういう人が生き残るのか」、観察をしていたというのです。その結果、得た1つの結論は「なぜか楽観的な人が生き残る」ということだったそうです。言い換えると「もうダメだ」と思う人ではなくて、「なお生きることに希望を持って行こう」という人が生き残る、ということでしょう。しかし、楽観主義で生きて行くのもなかなか難しいと感じます。なぜなら、自分の意志や力で希望を生み出すことは難しいからです。しかし、聖書がその助けをしてくれます。聖書のイエス様が、私達に力を下さいます。

「マルコ福音書」によると、イエスが十字架に架かれたのは午前9時、息を引き取られたのは午後3時でした。イエス様は、十字架の上に6時間架かっておられたこととなります。その6時間は、イエス様にとって筆舌に尽くしがたい「苦悩」の時間でした。イエス様の「苦悩」と比べることはとても出来ませんが、しかし私達にも信仰を持って歩んでいても「なぜ、どうして」ということがあります。その意味で、この箇所は「現実の『悩み・苦しみ』をどう受け止め、どう通って行くのか」、そのようなテーマについて語りかけてくれる箇所です。2つのことをお話しします。

### 1：苦悩の中で～なお神の愛に信頼する

イエス様をゴルゴダまで引っ張って来たローマの兵隊達は、ゴルゴダに着くとすぐにイエスを十字架に架けました。当時、十字架刑を執行する兵士は、囚人の身につけているものを自分のものにする事が出来ました。兵士達はクジを使って分けたのでしょう、下着以外の4つをそれぞれ1つずつ取りました。そして下着だけが残りました。下着は「上から全部一つに織った、縫い目なしのものであった」(23)と記されています。ある人は「それは大祭司が付けていた下着と同じであった。イエス様が私達を神に執り成して下さる本当の大祭司であることを示している」と言います。いずれにしても下着については、またクジを引いて1人がそれを取りました。イエス様が十字架で苦しんでおられる時、その側ではこのような冷酷なことが行われていたのです。しかしヨハネはこの光景について『彼らはわたしの着物を分け合い、わたしの下着のためにくじを引いた』という聖書が成就するためであった(24)と聖書の成就を見えています。

この言葉は「詩篇 22 編」の言葉です。「詩篇 22 篇」は不思議な「詩篇」です。これは、イエス様の十字架の 1000 年前、ダビデが詠んだものですが、そこには十字架の光景が描かれています。1 節「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか」(詩篇 22:1)は、イエスが十字架上で叫ばれた言葉です。そして 18 節「彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします」(詩篇 22:18)が、ここで兵士達がしていることです。それで「詩篇 22 編は十字架を預言した詩篇だ」と言われます。ダビデは自分の「悩み・苦しみ」の経験を通して、そこで味わったことを詩に詠みました。しかし結果として、「22 篇」はイエス様の受難を預言することになりました。だからイエス様の受難について語ってくれるのです。

もう一度 1 節を見ると、ダビデは「苦悩」の中で神に向かって「なぜ、沈黙をしておられるのですか、なぜ、手を出して救って下さらないのですか」と問います。今日、私達が「なぜ神様は何にもし

て下さらないのですか」と問う、さらには「神は結局何にもして下さらないのだろうか」と問う、それと同じ問いです—（「問い」というより「呻き」です）。そして、彼がそんなに苦しんでいるのに、人々（敵）は、神に頼る彼をバカにしたのです。また「着物を奪って分け合う」（18）ような残忍な態度で彼に迫ったのです。そういう切迫した状態で、彼はそれでも神を信頼して助けを求める叫び声を上げたのです。

しかしこの「詩篇」の特徴は、22 節から調子がかがらりと変わることです。これまで「苦悩」の中にあって、神の沈黙に嘆き、人々の嘲りの中で絶望的な叫びを上げていたのに、ダビデは、22 節から神を讃美するのです。24 節「まことに、主は悩む者の悩みをさげすむことなく、いとうことなく、御顔をかくされもしなかった。むしろ、彼が助けを叫び求めたとき、聞いて下さった」（詩篇 22:24）。つまり「神から見捨てられた、神は何もしない、神は私がこんなに苦しんで叫んでいるのに答えて下さらない」と思ったのに、しかし、後になって見たら、彼がそう思ったその時に、実際はそうでなかった。神は彼の近くにおられ、彼の祈りに答え始めておられたのです。ダビデはそれを言いたかったのです。

ある時、出会った青年から聞いた話です。好青年を絵に描いたような人でしたが、中学生の頃はものすごく悪くて手がつけられなかったと言うのです。彼のお母さんは、その頃、ある教会で伝道師として働いておられたそうです。私は「お母さんは、どうされていきましたか」と聞きました。「母は、毎晩のように泣きながら祈っていましたね」、彼はそう答えました。中学の時は、お母さんのその姿を見てもどうにもならなかったのですが、やがて彼は変えられて行ったそうです。そして神学校で牧師になる勉強をするようになったのです。神様は、祈りをちゃんと聞いておられたのです。そしてお母さんの祈りに答えて下さったのです。星野富弘さんの詩に「あてはずれ」という詩があります。「あなたは私が考えていたような方ではなかった。あなたは私が想っていたほうからは来なかった。私が願ったようにはしてくれなかった。しかしあなたは私が望んだ何倍ものことをして下さっていた」（星野富弘）。この「して下さっていた」という表現が教えます。神は、見ておられ、御手を添えておられたのです。

「詩篇 22 篇」に帰りますが、そうやって「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか…」で始まるこの詩は、神への絶望が、神への信頼、神への賛美に変わって行くのです。十字架の上でイエス様がこの詩篇の冒頭を叫ばれたのは、「神に見捨てられたような、いや実際に見捨てられた状態にある。しかし、それでも私は神に信頼します」という信仰を言い表し、「この苦しみ・悩みが、嘆きが、やがて讃美に変わっていく、それを信じ、全てを神に任せます」という、神への信頼を口に出そうとされたのではないのでしょうか。

そして実際、神様は、十字架を十字架で終わらせることはなさいませんでした。あの悲惨な十字架は、やがて栄光の復活につながって行くのです。神様は、イエス様の信頼に答えて素晴らしいことを為さるのです。そしてここに4人の女性が登場しますが、彼女達は、なおイエス様の中に一縷の希望を見ていた、信頼を置いていた、と言えるのではないのでしょうか。その4人の代表のような母マリヤと愛する弟子（ヨハネ）に、イエス様は言われます。「『女の方。そこに、あなたの息子がいます』…『そこに、あなたの母がいます』（26～27）。そして「その時から、この弟子は彼女を自分の家に引き取った」（27）とあります。ここにイエス様を中心とする共同体、教会が生まれるのです。神様は、女達の信頼を「世に祝福を告げ知らせて行く教会の誕生」という実として結ばせて下さるのです。

いずれにしても「悩み・苦しみ」の中で、私達はそれをどう受け止め、どう通って行けば良いのか、

ということについて示唆を与えられる気がします。それは、それでも神を信頼するということです。それでも神の深い御旨を信じ、神に希望を置くということです。そこに信仰者が「悩み・苦しみ」の中で立ち上がることの出来る秘訣があるのではないのでしょうか。教えられる次のような言葉があります。「失敗したからそれでおしまい、親しいものを失ったからダメ…なんてことは人間の考えです。人間の知恵や考えが終わったと思うところで、神の聖なるみ旨は終わっていないのです。いや、私達が失ったと思ったところに、はかりがたい恩寵がしばしば隠されているのです…神を信じる者は…自分の目には今は見えないけれど、神のみ旨は地下水のように深く滔々と流れていると信じるのです」(小島誠志)。このような信仰に生きたいと願います。

## 2: 苦悩の中で～神の愛の業を確認する

28節「この後、イエスは、すべてのことが完了したのを知って聖書が成就するために、『わたしは渴く』と言われた」(28)。「聖書が成就するために、『わたしは渴く』…」というのはどういう意味でしょうか。具体的には「詩篇 69 章 21 節」「彼らは私が渴いた時に酔を飲ませました」の成就でした。しかし、ヨハネは「1つの預言が成就した」というような、そんなことを言いたいのではないのです。「ヨハネ福音書」が書かれたのは紀元 90 年頃です。その頃、キリスト教会の中にグノーシスという大変勢いを持った異端が現れます。グノーシスは、「肉体は悪」、「霊は善」と極端に分けました。その結果、「善である神が悪である肉を取るはずがない」と考えたのです。「イエス様は、肉体を取られたのではなくて、肉体を持っているように見えたのだ」としたのです。だから、彼らに言わせれば、「神が苦しむということはないのだから、イエス様は『苦しみ・悩み』を味わわれたように見えたけれど、本当は何の『苦しみ・悩み』も味わうことはなかったのだ。神はそれほど凄いのだ」ということになったのです。そうやって神に栄光を帰そうとしたのです。

しかし、イエス様の十字架を見ていたヨハネは、イエス様が「わたしは渴く」(28)と言われたのを聞いたのです。イエス様は「のどが渴いた」と言われたのです。肉体を取ることのないイエス様だったら、渴くはずがありません。「のどが渴いた」と言われたということは、イエス様は、神の子でありながら、本当に人間となって私達と同じ弱い肉体を持って下さった、ということです。そして十字架の上で極限の痛みと、神の裁きの恐ろしさと、神から切り離される恐怖を味わい尽くして下さったということです。

「イザヤ書 53 章」は「救い主」についてこう言っています。「彼は、私達の病を負い、私達の痛みを担った…彼は…私たちの咎のために砕かれた…彼の打ち傷によって、私達はいやされた…彼を砕いて、痛めることは主のみこころであった…彼は、自分のいのちの激しい『苦しみ・悩み』のあとを見て、満足する」(イザヤ 53:1~12)。私は、「パッション」という映画の中で、苦しみながら十字架を背負って歩かれるイエス様を見て、「『勝手にしろ』と言って十字架を放り投げてしまわれればよいのに」という思いになったのです。でもイエスは、決して十字架を捨てられませんでした。なぜなら、あの十字架は、実は私達なのです。私達の運命を背負っておられた、だから捨てられなかったのです。イザヤが預言した通り、イエス様が「激しい苦しみと悩み」を引き受けて下さったが故に、私達の救いは本当になったのです。だからイエス様は「成し遂げられた」(30 新共同訳)と言って、息を引き取られたのです。ヨハネは、そのことが言いたかったのです。「あなた方の救い主は、あなた方に代わって、生身の人間として痛みの極みを味わって下さった、そのようにして救いの道を開いて下さったのだ。だからあなた達の救いは間違いがないのだ、十字架の故にあなた達は間違いなく罪赦されて神

の子とされるのだ。あなた達は、間違いなく神の御手の中にいるのだ」、そう言いたかったのです。私達を「悩み・苦しみ」が襲う時、自分では何も出来なくても、私達が神様の御手の中にいるなら、神が何かをして下さるといふ、希望があるではありませんか。

因みにCSルイスという人は、こんなことを言っています。「神であるイエスは、本来、死ぬ必要のない方である。あえて言えば、死ぬことが出来ない方であった。でも人間になれば死ぬことが出来る。イエスは私達が死に際してもイエスの御跡を見ることが出来るように、イエスと会うことが出来るように、死んで下さった」(CSルイス)。イエスは本当に苦しみ抜いて下さいました。それだけではなく、本当に死んで下さったのです。そんな方だから、私達がどんな苦悩の中にいる時でも、イエス様は、その苦しみを知っている方として私達と共にいて下さるのです。私達には、やがて死ぬ時が来ます。でもその時にも、私達は、死んで、葬られて下さったイエス様を、そこに見い出すことが出来るのです。

なぜ、私達に「悩み・苦しみ」がやって来るのか、それは分かりません。しかし、分かることがあります。私達が「苦難」の中で神様に希望を置くことが出来るように、そして、そこで共におられるイエス様を見ることが出来るように、イエス様が「苦難」を先に背負って下さったということです。神様は、私達のために独り子の十字架を忍んで下さったということです。そのことは、主が私達を見捨ててはおられない、愛して下さっている、という事実を伝えるのではないのでしょうか。私達は「悩み・苦しみ」の中でも、この事実を目を向けることによって——苦しみは現実です——しかしなお希望を持ってそこを歩いて行くことが出来るのではないのでしょうか。主の十字架に感謝したいと思います。

### 3: おわりに

『悩み・苦しみ』をどう受け止め、どう通って行くのか、今朝、2つのことを申し上げました。「苦悩の中で」、「なお神の愛に信頼する」、そして「神の愛の業を確認する」。そのようにして、困難の多い日々の生活を、神様の愛に支えられて、歩いて行きましょう。